9/22〜9/28
8名がウクライナへ

原発事故から31年 いまチェルノブイリはどうなっているのか

チェルノブイリ立入り禁止地域（30kmゾーン）と
ナロージチ地区を視た

そこは巨大な「軍事施設」だった。
―「多くの真実」が隠されたまま、森の中に沈んでいた。

1986年4月26日未明、ウクライナ・チェルノブイリ原発4号炉で原子炉がメルトダウン。爆発、炎上。大量の放射性物質が飛び散った。あれから31年。私たちは、その地へ飛んだ。首都キエフ。チェルノブイリ。プリピャチ。立ち入り禁止ゾーン。事故後3年間放置されたナロージチ地区。移動距離1023キロメートル。プリピャチの観覧車を覆う木々の葉音が耳奥で鳴っている。

参加者

木村　真三（独協大学）	根本　　敬（福島県農民連）
菊地穂奈美（郡山地方農民連）	馬場　　績（浪江町議）
坂本　充孝（東京新聞福島支局長）	横山真由美（福島県農民連）
菅野　正寿（安達地方農民連）	千葉　百子（順天堂大学）

旅　程

22日	21:25	成田発（飛行時間12時間45分）
23日	4:10	イスタンブール着
	6:55	イスタンブール発
	8:50	キエフ着
	9:00	木村真三氏出迎え
	昼食後	チェルノブイリ障がい者市民団体「ゼムリャキ」訪問
		キエフ泊
24日	8:00	キエフ発　立ち入り禁止ゾーンへ入域
	昼食後	原発周辺、プリピャチの案内
		オラネ村民泊
25日		ゾーン入域　チェルノブイリ2見学
		クパヴァーテ村、オパチチ村へ
		オラネ村民宿泊
26日	8:00	オラネ村出発　ナロージチ地区へ
		バザールと食品測定所を見学
		ナロージチ地域共同体長のレオンチューク氏からナロージチを紹介
		ラスキ村農場長にナロージチの農業について話を聞く
		キエフ泊　反省会
27日		キエフ市内視察
	21:20	キエフ発
	23:30	イスタンブール着
28日	1:40	イスタンブール発
	19:30	成田着

癒えぬ傷

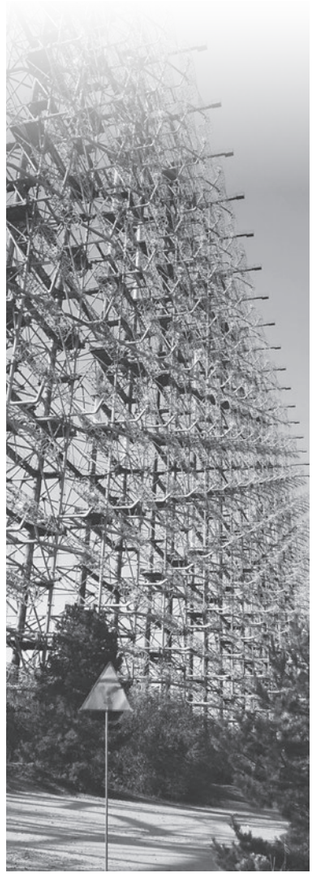
23日、キエフにあるチェルノブイリ障害者市民団体「ゼムリャキ（同郷人）」を訪ねた。そこで、7歳の時プリピャチで事故にあい、甲状腺の手術痕が首に残る女性に話を聞いた。彼女は現在38歳。23歳の時に甲状腺がんの手術。手術時には妊娠しており、翌年に男の子を出産。現在その子は14歳、甲状腺に異常が発見されているという。息子とは甲状腺の話をしており、とても不安に感じている。だけど悔いのない人生を送らせてあげたいと。「被災していない人は原発事故を忘れていくスピードが速いだろう。でも私と私の家族は絶対に忘れない。」

今、日本では福島原発事故を終わりにしようとしている。まだまだ終わっていない、むしろこれから「始まる」のではないか、そう思わずにはいられなかった。

決して元には戻らない被災地

24日、30kmゾーン、10kmゾーンへ。ゾーンとは居住禁止区域、立ち入り禁止区域のこと。立ち入るには許可と専門のガイドが必要で、検問ではパスポート必須。31年経っても、ここは「別の国」か?

当時、2つの市と93の村が消えた。そのうちの12の村はあまりにも高濃度に汚染されたため建物を壊して土に埋めた。今でもその周辺の放射線量は高い。通訳さんは埋め立てを「埋葬」という言葉を使って訳していた。まさに「埋葬処分」なのかもしれない。



避難区域で暮らしているサマショールの老婆たちに会う。サマショールとは立ち入り禁止区域とされた土地に、自らの意思で暮らしている人々である。高齢者ばかり、必要最低限のインフラがあるとは言え、病院は遠い、子や孫は帰ってこない、これが福島の避難解除区域の未来でないと言い切れるだろうか。帰りたい人、帰らない人、区域外で避難した人、避難したいのにできない人、福島に残った人。どれも決して否定できない選択なのだと改めて思い知る。人間の尊厳について考えさせられる、そんな訪問になったと思う。

25日、再びゾーンへ。破損した原発は新石棺によってきれいに覆い隠されていた。そこに多くの観光客が、ドームを背景に記念撮影。線量は1・12μSv/h。

チェルノブイリ2 秘密軍事施設

プリピャチへ向かう。鉄筋コンクリートの無数の建物が、枝葉を大きく伸ばした木々に覆い隠されている。原発から8kmほどの森の中を歩いていくと途轍もないアンテナ群が現れた。チェルノブイリ2と呼ばれる秘密軍事施設。高さ150m、長さ800mにも及ぶレーダー。冷戦時代、西側諸国の動きを探ることが役目だったらしい。チェルノブイリ原発で発電された電気の10分の1はこの施設で使っていたとか。まさに原発と軍事が一体であったといえる。原発の技術は核兵器の技術にもつながるともいわれる。日本政府は多くの国に原発の技術を輸出しようとしていることは核兵器と軍事の輸出にもつながることである。生態系を活かした農業と農村の営みは、原発と軍事に対峙した命と平和の営みであることを伝えていかなければならない。

私たちはたたかい続ける

26日ナロージチ地区へ。地域共同体長（首長にあたる人）から「避難自治体」の抱えている問題を聞くことができた。また、集団農場の責任者の案内で農場も見学させてもらった。地平線まで続くひまわり畑の中を、巨大ロボットに変形しそうなコンバインが収穫作業をしているのを見て全員が感動。

チェルノブイリはドームで隠され、人々が暮らしていた町は森の中へ森の中へと隠れ、沈み込んでいた。チェルノブイリ・ウクライナに「たたかい」の芽は見つけにくい。

日本もこのまま「事故の検証と究明。そして、たたかい」がなければ、チェルノブイリと同じ道を歩むことになる。私たちは、被害者・犠牲者で終わってしまう。まだ、私たちは間に合う。たたかい続ける道があるから。

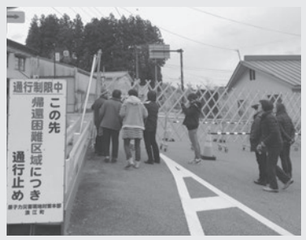
農民連フラッシュ flash

地域の農業と食を守る

秋のグリーンウェーブが始まり、11月16日福島県農業会議と福島県関係部署との懇談が行われました。来年からの稲作農家の下支え制度や生産調整の廃止、農協攻撃など安倍政権の進める農業攻撃は地域農業や地域経済に大きな打撃を与えます。県内自治体、農協訪問も順次計画され、地域を守る協力共同をどう作るかなど懇談していきます。

原発事故被害の困難さを実感

11月20日、女性部25人で帰還困難区域の浪江町津島地区の現在の様子や津波被害と原発被害を受けた浪江町請戸地区の様子を視察しました。紅葉のきれいな山々の間に葦や柳の茂った田んぼが続き、奥に続く道路の入り口には柵が設けられ、事故から6年8ケ月過ぎた風景は殺伐としたものでした。避難解除になった地区も更地になった土地や解体を待つ家など、原発事故の特異な困難さが改めて実感させられました。



NOTE

青年部の活動、地元の農や食のことをリレーで紹介

若き農業者のつぶやき　のーと

せいねんぶ農人

昨年は天候不順で稲刈り周りの作業が大きく後ろに倒れ、その巻き返しに大忙しでした。しかしどんなときもしっかり情報の共有は怠らず安全な作業を心掛けています。寒さの厳しい時期ですが、社員一同一層がんばります!　by三浦